

家庭科

馳 裕紀子

1 家庭科における「よりよい未来を志向する子」

新学習指導要領において、家庭科における資質・能力については、実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けるとともに、生活の中から問題を見いだして課題を設定し、それを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し想像しようとする態度等を育成することを基本的な考え方としている。

そのため、本校の家庭科では、衣食住などに関する知識及び技能を身に付け、それらを家庭生活の中に取り入れ、実践していくことを通して、子どもが家族の一員として自分の生活をよりよくしようとすることをめざしている。製作、調理などの実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動に目的意識をもって取り組むことにより、実感の伴った理解につながり、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることができるだろう。また、生活環境の異なる友達と自分の生活について話し合い、交流することで、新たな気づきを得ることができる。これらの身に付けた知識及び技能や新たな気づきが、家族の一員として家庭生活の中で実践しようとする子どもにつながっていく。

家庭科における「よりよい未来を志向する」とは、身に付けた知識及び技能や行為のよさを自分の生活場面にあてはめ、生活をよりよくしようと考えを更新し、生活場面で使えるようにしていくことである。そのためには、生活経験をもとに身近な生活事象をふり返ることで、「もっとこうしたい」「なぜこうするのだろうか」といった自己の思いや考えをもつ。そして、実践的・体験的な活動を行い、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けたり、その生活に欠かせない行為のよさを実感したりすることが重要である。

以上のことから、家庭科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・ 題材のゴールや本時の課題意識・目的意識をもち 自分の生活をよりよくしようと学び続ける子
- ・ 他者の思いや考えを共有し 多様な視点で生活事象及び自分の生活を見直す子
- ・ これまでの学びを自分の生活に当てはめ 自分の生活をよりよくしようとする子

2 家庭科における決める授業デザイン

題材導入時に自分の生活場面をふり返る活動を行う。生活場面をふり返ることで、これまで特に意識することなく行っていた行動に気付いたり、なぜそのような行動をするのだろうかと疑問に思ったりするだろう。また、生活場면을想起し、自己の思いや考えを話し合うことで、学習することに対するイメージが広がる。これらが学習に対する関心を高め、題材を通しての課題意識・目的意識をもち、学習計画を立てる（決める）ことにつながっていく。

子どもは、それぞれ生活環境が異なるため、同じ生活事象に目を向け、かかわったとしても、同じ見方・考え方をする子どももいれば、異なった見方・考え方をする子どももいる。「同じ考え方だけど、していることが違う」「考えていることは違うけど、していることは同じだ」などと比べるだろう。このように他者とかわかることで、自分の見方・考え方を広げたり深めたりし、自分の考えを更新していく（決める）。

題材終末時には、家庭で実践する計画を立てる。題材導入時にできなかった、わからなかったことが、できるようになった、わかるようになったときに「家でもしてみようかな」と思うだろう。そこで、家庭でどのように実践するのかを決める。これまでに学習したことをもとに、自分の生活がよりよいものになるよう考える。家庭で実践することができれば、自己の成長を実感することができるとともに、家族にほめられ、家族の一員だと改めて感じることもあるだろう。

3 決める授業の手だて

(1) 学びへの原動力を形成する「決める」

家庭科では、身に付けた知識及び技能を家庭で実践することが重要である。そのため、題材終末時に家庭で実践することを考え、これまでの生活をふり返った上で、題材を通しての課題を決める。そして、題材を通しての課題を意識しつつ1時間ごとの課題をつくっていく。課題を追究する意欲が高まるとともに、目的意識をもって製作、調理などの実習方法を決め、学習を進めることができる。これらをくり返すことで、日常生活に必要な知識及び技能が身に付き、自分でできることが増えた実感し、家庭での実践への意欲を高めることにつながる。

生活場面をふり返る際には、ワークシートを用いる。ワークシートには本題材で学習する内容にかかわる自分の生活をふり返り、記述する。例えば、朝食の役割について考えるのであれば、その日食べた朝食の内容を、生活時間について考えるのであれば普段の生活時間を記述する。可視化することで、これまであまり意識することなく行っていた行動について改めて考えるきっかけとなる。そして、記述したことをもとに話し合うことにより共通点や相違点が明確になり、学習することを焦点化することができる。

また、学習する上で大切なキーワードを示すこともある。例えば、季節に合った過ごし方を考える際、始めにキーワードとして「快適」という言葉を示す。子どもは生活場面を想起し話し合うことにより、夏であれば「すずしい」や「べとべとしない」など具体的なイメージをもつ。イメージをもった子どもは、家族の様子を見たり聞いたりし、自ら課題について考えるようになる。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

日常生活に必要な知識及び技能を身に付けるには、実践したり体験したりすることが大切である。しかし、考えることなく実践したり、何となく体験したりしても、実感が伴っていないければ、知識及び技能が身に付いたとは言いがたい。そこで、大きな課題に対して、それぞれの子どもやグループが多くの観点の中から一つの観点を決め、そのことについて試したり調べたりする活動を行う。互いに試したり調べたりしたことを伝えたり、受けとめたりすることで、課題を解決することや、より広く深い実感の伴った理解につながる。

これまで自分が意識することなく行ってきた日常生活の行動が、他者とかわることにより、日常生活を送る上で有効な知識であったことに気付くこともある。複数の行為の違いについて考えることで、生活経験をもとにした知識の価値や利点に気付くとともに、自分の生活に必要な知識及び技能を選択し（決める）、身に付けることにつながると思う。

(3) 今までの学びをふり返り 未来に役立てる「決める」

日常生活に必要な知識及び技能を身に付けた段階で、これまでの学習をふり返る場を設定する。何ができるようになったのか、わかるようになったのかを明確にすることで、自己の成長を実感するとともに、どのようにして家庭で実践するのかについて決め、実践への意欲を高めるためである。できるようになったこと、わかったことは「1年間の学び～家庭科の学習を通して～」という1枚のワークシートに書き足していく。少しずつできるようになったことが増えていくことで、自己の成長を実感することができるだろう。

家庭での実践について決める際に、家庭実践計画書を作成する。だれのために、何をするのかを決め、計画書に記述する。相手意識を高めることにより、学習したことをもとに、自分の生活に合ったものへと工夫することにつながるからである。家庭実践計画書をもとに家庭で実践した後、実践したことを文や写真などで記録し、家族からコメントを書いてもらい、家庭実践報告書とする。家族からの「おいしかった」「してくれて、ありがとう」などのコメントは「実践してよかった」という満足感や達成感、家族の一員であることを改めて感じることにつながり、「また、したい」という次の実践への意欲を高めるだろう。「こんな方法があるよ」「こうするととってもいいよ」などの家族からのアドバイスは、「次はこうしてみよう」という生活をよりよくすることへとつながっていく。